

村に吹く風

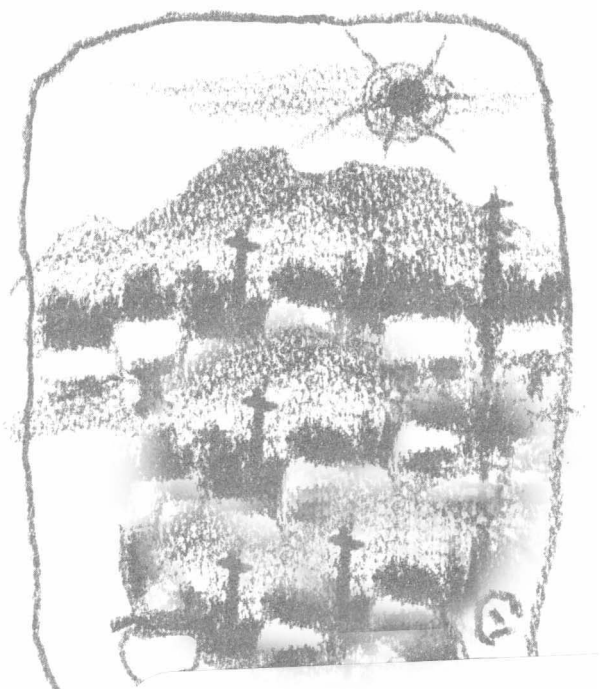
山下惣一



新潮社

村に吹く風

山下惣一



むら ぶ かぜ
村に吹く風

1984 年 10 月 15 日 印刷

1984 年 10 月 20 日 発行

定価 980 円

著 者 やま した そう いち
山下 惣一
発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話 業務部 (03) 266—5111
編集部 (03) 266—5411
振替 東京 4—8 0 8
印刷/三晃印刷株式会社
製本/植木製本株式会社



© Sôichi Yamashita Printed in Japan, 1984

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-354801-0 C0095

村に吹く風／目次

I れんげの花が消えた

レモンの夢

春の嵐

百姓の土泥棒

選挙凶作

貴婦人キュウリとエントロピー

蓮根田からの眺め

やはり野に置け、れんげ草

ツバメも住宅難

海の幸、山の幸

亭主の言い分

機械化貧乏

米にもブランドがあるのです

先祖を捨てて

9 15 19 23 27 31 35 40 44 48 53 57 62

II 牛肉食いたし、アメリカ憎し

この肉一キロ一万円

後継者たち

見舞の酒

貧の健康法

安値のキャベツ、今年はどうする

先祖送り公害

村だから、学習塾

コオロギと平和共存、秋の宵

レーガン、シュルツにエアメール

凶作の秋

あけびの味はほろ苦く

アメリカからの便り

先祖を祀る

69 74 78 83 88 92 96 100 107 112 116 121 125

Ⅲ アパートと若衆宿

村の外れにアパートが	133
葬式のあと	137
知らんぷりしてVサイン	142
村ではタブーの「じゃ、ここで」	147
嫁が姑を越えるとき	152
結婚式今昔	156
旧婚旅行	161
こりゃ悪平等というもんばい	166
イタチを食う	170
村の根っこ	173

Ⅳ 百姓は少数派。でも、土がある

冬の小鳥はミカンで満腹	181
師走の風	184
家庭菜園の一一九番	189
あとつぎ三代	194
同窓会で女たちの述懐を聞く	199
飲んべえの気くばり	204
キャベツをまいた、その結果	209
国境の家族に百姓の原点を見る	212
なにをいまさら米不足	218
減反拒否	226
少数派の宣戦布告	231
風の方角	235
*	
あとがき	241

装画
畦地
梅太郎

村に吹く風

I

れんげの花が消えた

レモンの夢

レモンの花は季節をしらない。次から次へ薄紫のつぼみをつけ、思ひ思ひに開いていく四季咲きである。きつと原産地は四季のない熱帯地方なのであろう。

レモンを植えてみて初めてそのことを知った。これは思いがけないことであつた。

桜の花が日本を象徴し、パッと咲いてパッと散るのが日本人の心情とするなら、レモンの花は非日本的である。同じ枝に隣あつていても、一方は満開もすぎて青い実をつけているのにもう一方は固いつぼみで、いかにも、君は君、我は我、されど仲良きといった雰囲気ですべて万事個人優先の成熟した民主主義社会を思わせる。

五年前の春、根づくのかどうか案じながらミカン園の陽だまりに三本のレモンの苗を試験的に植えてみた。

温州ミカンが安値でどうにもならない。ことに私の村、唐津市湊では早生温州が駄目である。玄界灘に面しているので、対馬暖流の影響を受けて冬でもめったに霜さえ降らない。おまけに昼と夜との温度較差が少いからミカンの色づきが遅れる。早生温州が十一月にならないと出荷でき

ない。十一月といえは早生ミカンの底値の時期である。

私も三反歩（一反歩は三百坪、約一千平方メートル）ほど早生温州を植えていたが、すでに二反歩は荒らしてしまった。早生ミカンから何に転換するか迷っていたのである。

国も補助金をつけて、ミカンからモモやカキ等の落葉果樹や、ネーブル、伊予柑などの高級晩柑類への転換をすすめているが、今さら国の指導を信じる気にはなれなかった。

ちょうどその頃、神奈川県消費者グループの人たちが「国産レモンを食べる運動」をはじめていることを新聞で知り、さっそくパンフレットを送っていただいた。

昭和三十九年のレモン自由化によって、国内のレモン産地はつぶれてしまった。だけど、人が直接口に入れる生鮮食料品を遠い国から運んでくるのは、いろいろと問題がある。まず目的地に着いたあとも腐らないようにしなければならない。輸入レモンにはアメリカ国内では食品添加物として認められていない白カビ防止剤のOPPが使用されている。ワックスもかけてある。

そうではない安全なレモンを求めて、消費者が自分たちのためにレモンの国内産地を育成しようという、これまでにはなかった新しい運動がはじまっていたのである。

——ああ、世の中にはこんな人たちもいるのか——私は久しぶりに魂を揺さぶられる思いがした。

そのことが、直接のきっかけとなった。

さっそく農協に連絡をとって、三本の苗を手配してもらったが、その中の一本は家に着いた時からすでにほとんど枯れていた。当時はレモンの苗を作る人さえいなかったらしい。しかし、残りの二本は年々旺盛に生長して、昨年（昭和五十七年）秋にはびっしりと実をつけた。まさに鈴

なりで、遅れて成った小さなレモンは残して、一定の大きさに育ったものばかりを収穫したら、二十キロ入りのコンテナにいっぱいあった。

「こげん青かとばちぎって、どげんすつとね」

収穫しながら女房が不審そうにいう。

木に成ってる時のレモンは青いのである。果物の輸入業をやっている知人がいるので電話で何か訊ねて、そのことは私は知っていた。

それこそ、君は君、我は我と思いいに育つので、大学生と幼稚園児が同居しているあんばいなのである。青いレモンを一定のサイズに育ったものから収穫して、追熟処理で色づきを早めて店頭に出す。そういう手順なのだという。

さて、二十キロのコンテナいっぱいレモン。どうしようかと思案した。私はすっぱいものが嫌いだし、わが家では料理にレモンを使う習慣はほとんどない。いくらなんでも、国内のレモン産地をつぶした敵のものをよるこんで食う気はしない。百姓だから、それくらいのことだわりはもっている。しかし、今度はそれがわが家でとれたのである。

「売りに行ってみろか」と女房がいい出した。

波止場のそばに毎朝、朝市がたつ。女房は白菜やレンコンと一緒に一輪車にのせて売りに行った。が、さっぱり売れない。

「こりゃ、何ね」「レモン？　なんでこがん青かと？　ほんなこて、レモンね」

客たちは、疑わしそうに、あるいは不審げに遠まきに眺めるだけで手にとってみようともしな

かったという。

「おおかた、こんなことだろうとは思うとったばって、やっぱそうだった」

客から浴びせられた不信と疑惑のまなざしを女房はそのまま私に向けてきた。

仕方がないので、毎日一個ずつ輪切りにして風呂に浮べてレモン風呂にした。レモン香のする湯気をくんくん嗅ぎながら湯船につかっていると、ちょっぴりリッチな気分である。

はじめは、なんとなく肌がチカチカする感じだったが慣れてくるとそれもなくなつて、

「肌がすべすべする」「湯ざめがしないような気がする」と二人の娘たちは大喜びである。

「おい、ちょっと来てみる、けしからんこつ」

ある朝、母が頓狂な声をあげた。

風呂場へ行った私は「ほう」と思わず声をあげた。夜、湯の面に浮んでいた輪切りレモンは、翌朝になると底に沈んでいる。レモンが沈んだ場所だけ、きれいに湯垢が落ちて、浴槽が光っているのである。

「浴槽みがきに使おう」

風呂掃除は母の受持ちである。

レモン風呂につかりながら私はいろいろと考えた。まず、レモンが栽培できるということとははつきりした。しかし、売れなければいくらできても仕様がなない。

「もし、日本の家庭にレモン風呂が定着するようになれば……」

ふっと、そんなことも考えてみる。

「そうなれば、ワックスやOPPを添加したレモンでは、それらが湯の面にガラガラ浮ぶのではないか。コーラや紅茶は液体の色が濃いから肉眼で見えないだけの話だろ」

この思いつきに私はほんのちょっぴりだが興奮した。輸出品にもアキレス腱はあるぞ。

私の村では、いますぐ青いレモンが売れるということはないだろうが、都会では、消費者の方からレモン産地を育てようという運動さえ起きている。

将来性はある、と考えていいのではないか。温州ミカンに較べると国内でも栽培可能な地域はるかに狭いとも聞いている。早生温州が色づかないほど暖かいという私の村のマイナス要因が、レモンを植えればプラスに働く……そう考えると、どうしてももう少し植えたくなった。

この春、新たに九十本のレモンの苗を植えた。女房は猛烈に反対したが、思いこんだらとまらない。

ユーレカ種。苗木一本が千円。九十本で九万円。

苗を持ってきた農協の橋本技術員が、小馬鹿にしたように笑った。

「九万円も出してレモンの苗^こ買うてどうするですか。それより九万円貯金して、その利子でレモン買った方がなんぼか得ですよ。何を考えとるですか」

「馬鹿たれ、営業用ぞ」

「それをいうのは苗木屋さん。いいカモ」

カモだろうとアヒルだろうと、やってみるしかない。温州ミカンの一部を伐採してレモンに植えかえた。

「身を切られるとはこういうことね」

女房がぼやく。レモンのために切り倒されたミカンは女房が嫁いできた春に植えて、二十年育ててきた木だったからである。そして植えかえたレモンにしても将来どうなるかはわからない。少くとも答えが出るのは十年先のことだ。

「今度は間違いなか。あと六、七年もたてば、もぎたてのフレッシュレモンで売りだしてみせるぞ」

一個五十円、いや三十円でもよい。都会の家庭の浴槽なら一回にレモン半分で十分だろう。

風呂によし、料理によし、焼酎やウイスキーを割るのにも使える。レモン化粧水だって作れるぞ。国産の減農薬、ノーワックス、防腐剤なしのクリーンレモン……。

いいながら、以前にも似たような夢を女房に語ったことがあったなあ、と思った。もう二十年以上も昔のことである。私たちの場合は、新婚旅行にも行けず、結婚式の翌日から毎日ミカン山の開墾に通った。ミカンを植える場所を背丈ほど塹壕型に掘っていくのである。そこへ木とか草とかの粗大有機物を埋めてミカンを植えるのだった。

小石、竹の根、木の根があつて、今から思えば苛酷な労働だった。だけど、当時はちっともつらいとは思わなかった。たのしくて仕方がなかった。

今日は何メートル掘った、明日はもっと掘るぞ……。

夢があつたから楽しかったのか、現実のつらさを忘れるために夢を語りあつたのか、たぶんその両方だったのであろう。

二人で夢をみて、夢を育て、その夢を伐ってまた新しい夢を植える。夢は、しょせん夢。いつかはさめる。少くともこれまでの夢はみんな無残にこわれてきたのに、それでもまたやってみる